喜劇前線地帯

遊楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喜劇前線地帯

【Ｎコード】
Ｎ４７３１Ａ

【作者名】
遊楽

【あらすじ】
少年、大和（ヤマト）は運命的な出会いをした。少年の前に現れたのは少女、幸（サチ）。幸「助けてください、悪いもの達に追われてるんです」そして、少年はこの可哀相な美しい花のような美少女を助け――――大和「違う！！違う！！そんな綺麗な話じゃない！！！あいつは僕の背後にいきなり現れ……って！？さっ、幸さん！！？何して…ギャーーー！！！」…こんな話です（笑）

vol.1 ＝come acrosso of night＝（前書き）

楽しんでいただければ、うれしいです（^-）

この小説はできれば、改行制限なしで読んでください。

vol.1 ＝come acrosso of night＝

いつ、どこで、誰が、その場の状況で、何を思って、どう行動するかは、その誰にしかわからない。相手の行動は自分が予想していた通りには、いつだってなるとは限らないのだ。

これはそんな行動をおこす女の子と、女の子に巻き込まれる男の子の話。

男

「あっちにいたぞー！！おぇー！！！」

一人の少女が、住宅街のさほど大きくない公園に逃げこんでくる。どうやら、男達はこの少女を追っ掛けているようだ。

少女

『どこか隠れる場所は…』

少女は公園の来たところと反対側の比較的近い公園の出口のすぐ傍の木の影に隠れ、気配を消す。そこへ丁度、男達が公園に入ってきた。その中には男達と同じ格好をしてながらも、他の男達と髪の色が違う金髪の男と、黒いセミロングの髪をした女もまざっている。

男

「見失ったか！？」

金髪の男
「まったく、逃げるのうまいんだから。こりゃ、捕まえるの難しいな」

金髪の男は何やら、かなりやる気がない。セミロングの女は何やら、機嫌が悪そうだ。金髪の男以外のまわりの男達は何やら、セミロングの女を恐れている。

セミロングの女
「…捕まえられなかった場合、あなたたち……、どうなるかわかってますよね…？」

小さかったが、妙に怒気がこもった声は、男達にはしっかりと聞き取れたようだ。その声を聞いたとたん、セミロングの女と金髪の男を残して、散々に別れかけていった。

グゥ〜

金髪の男
「……。」

セミロングの女
「……。」

金髪の男
「さて、もしかしたら近くのコンビニに、いるかもしれないし、行くかな」

セミロングの女は、ニヤニヤしながら言う男を睨み付け…

セミロングの女
「…私も行きます…」

と言って後についていった。セミロングの女は、腹が減って機嫌が悪かっただけのようだ。

少女
「ふぅー、行ったようだな。しかし、お腹がすいたな。それに今夜の寝床も探さなければ…」

少女は公園から出て、公園のまわりの家を見てまわった。そして十分ぐらいたっただろうか。少女はある家に目星をつけた。その家はもうあたりは暗くなっているのに、明かりがなかったからだ。

ニヤッ

少女
「ここにするかな♪」

少女はなにやら針がねらしきものをとりだし、鍵穴にそれを差し込み始める。しかし、足音らしきものが聞こえてきたので、中断しざる終えなかった。

少女
「チッ」

少女はすばやく家庭の木に隠れた。そこへ、いかにも貧弱そうな少年があらわれたでわないか。どうらやら、ここの住人のようだ。

少女
「都合がいいかな…」

そして、懐から黒い物を取り出した…

僕の名前は神条（シンジョウ）　大和（ヤマト）。性格はいいやつという印象だと思っている。人に頼まれるとなかなか断れないところもあるから。

家族は見た目は強そうだが、中身は弱い父さん（４３歳）だけだ。やさしく、とても強かった母さんはもうこの世にはいない。僕が中学に入ったとき、事故でいなくなった。

それ以外では、いったって一般的な、十七歳のはずだ。

ゴリッ

…そんな僕に、今、知らない女性が僕の頭の右側面辺りに、黒くて、冷たい、重量感があるものを突き付けている。

大和

『なぜ！？こんなことに…！？　僕は何かしたのか！！？

この人はだれ！！？』

このいきなりの危機的な状況に、体は冷静に動かなかった。いや、動けなかった。さらに、言葉も出なかった。大パニックな頭の中は、この状況になった答えを必死に探すため、フル回転で働いた。

大和

『あぁっ～！！僕はなぜこの危険そうな人に、こんなことをされているんだ！？　いったい、いつこうなったんだ…！！？』

…今日はいつも通り、朝八時から店長にいろいろ叱られ、バイト終わらせた。帰宅の前にコンビニに晩飯を買いによったな。このとき、デラックス弁当か、焼肉弁当かかなり迷って気が付くと、黒

スーツに黒グラサン男女の二人組に両方とも取られていた。それで弁当売り切れに…。

大和
『はぁ～、僕の優柔不断…』

結局、おにぎり三個買って、自分の家に向かって足を進めたんだよな。途中、恐そうなお兄さん&おじさん達に睨まれたけど、極力気付かないふりして、早足で通り抜けたな。
そして自分の家が近づいてきて、お守りとキーホルダーがつけられた鍵を取り出し、鍵穴にその鍵を差し込んで…

少女
「動くな…。そして騒ぐな…」

大和
『ここだー！！！
僕、ここでこの状況に！！　そんでもって、僕何もしてないのに！！？』

そして、その少女は少年の様子を見て、可愛らしい唇を歪ませ…『ニヤッ』と一度怪しい笑みをした。

それが女の子と男の子の出会い

to be continued

Vol.2 ＝threatening of night＝

よくマンガなどで、道角で偶然ぶつかって、少し驚く出会いなどがある。しかし、僕が体験している出会いは、その驚きより、特別強烈。

…僕は悪魔と出会ってしまったのだ。

今日は金曜日。時間は七時半ごろ。それはおこってしまった。

今、少女は怪しい危ない笑みを浮かべている。

少女
「おい…」

大和
「はっ…はい！！なっ、何でしょう！？撃たないでください何でもします！！！」

少女
「素直なのはいいことだ。じゃあ、とりあえずここじゃなんだから、家に入ろうじゃないか。…要求はそれからだ」

家のリビングにあがり、僕は部屋の明かりをつけさせられて、その女性を…、その少女をはじめてちゃんと見た。なぜか、黒のス

ーツをきている。ご丁寧にネクタイまでして。歳は同じぐらいで、身長は１６５ｃｍぐらいだろう（ついでに僕は１７２ｃｍ）。髪は黒の長めのポーニーテール、少しつりあがったきれ目。全体的に整った顔立ちだ。そして、少し驚いたが、普通に思った。

大和『きれいだ…』

少女
「何じろじろ見てる？…撃っていいんだな」

大和
「…ごめんなさい」

大和
『…前言撤回
…恐い
すごく、生命の危機を感じる！！
なっ、なんとか逃げないと！！助けを呼ばないと！！』

少女
「逃げようと思ったり、助けを呼ぼうと考えたりは無意味だからやめておけよ」

大和
「そっ…そんなこと考えてません！！」

大和
『なぜ、わかったんだ！？
……はっ！？
…ま、まさか、これが読心術というやつか！？
彼女は心を読めるのか！！？』

少女
「顔に出てたぞ」

大和
「…っ！？」

大和
『僕はなんてベタなミスを！！』

少女
「ここの住人は、おまえの他に誰がいる？」

運がいいのか、運が悪いのか、父さんは主張中だった。僕は親思いなので、運がいいほうととった。だが、正直な話。父さんが…

大和『…羨ましい』

少女
「答えろ…」

チャキッ

少女は大和に拳銃を押しつけた。必要以上に押しつけるので、大和はかなり痛かった。

大和
「と、父さんが一人だけです」

すると、少女は何かを考えるような顔をする。

少女
「……そうか。…それより、この家は客にお茶も出さないのか？」

いつのまにか、彼女はソファーにわがもの顔で、くつろいでいた。もちろん、拳銃の標準はちゃんと定まっている。

大和
「…客ですか？」

少女
「客だ…」

大和
「……。」

少女
「……。」

ガチャッ

彼女は手にしているものを向けなおした。

大和
「…こ、紅茶と日本茶どちらがいいですか♪」

僕はできるだけ『ニコリ』と微笑んで質問した。

少女

「日本茶をたのむ」

彼女も『ニヤッ』と微笑んで答えた。

僕はキッチンでお茶の用意をしはじめた。何度も言うが、銃口はやはりこちらを向いている。

大和

『…やっ、やっぱり恐い　　……くっ！！どうにかしてこの危機を乗り越えないと！！』

とりあえず僕は、やかんを火にかけながら、冷静に考えるように努力しはじめた。

大和

『なぜ、この彼女に脅されなくちゃいけないんだ。

家は金持ちでもないのに…。

……いや、…その前にあの拳銃は本物なのか？

…そっ、そんなわけがない！！ここは日本なんだ！！

そんなものをこの彼女が持ってるわけがない！！！

…なら、大丈夫…大丈夫なんだ！！！

…よし！！逃げよう！！！』

そして大和はすぐさま行動を開始。玄関へつづく廊下にむかって走りだした。　玄関へとつづく廊下まで、あと距離にして７ｍ…、６ｍ……。

ドギューン！！！

大和

「…って！？うわぁぁぁぁぁーーー！！？」

ドギューン！！！

少女
「…黙れ」

大和
「……。」

少女はあきれたように、ため息を吐いた。

少女
「だから、無意味だといったのに」

大和
『…ほっ……本物！！？
てか、迷わず撃っちゃたよ！！？』

この匂いが硝煙というのだろうか？その匂いが鼻に入ってくる。僕は冷や汗で、全身がだらだらになった。
運良く……ではなく、わざと外された弾丸は、壁を二ヶ所えぐっていた。
僕の危険人物ランクの『Sランク』に決定された。

少女
「次、おかしな行動したらあの世が見れるからな」

そう言い、懐に拳銃をしまった。

大和は熱い日本茶を少女の前に、恐る…、恐る…、置いた。少女はそれを一口飲み、言った。

少女
「要求がしたい。こっちに座れ」

大和『…命令なんですね』

僕はそう思いながらも、まだまだ死にたくないので、反対のソファーに座った。
正面の少女はやっぱり、きれいだ。天使の仮面をした悪魔というところだが…。

少女
「悪魔だと…？」

大和
「そっ、そんなことないですよ」

大和
『まさか、またも顔に出てしまったか…！？』

少女
「まあ、いい。」

少女にはちゃんとばれていたようだ。だか、少女はひんやりとしたオーラと冷たい視線をだしながら、なぜか簡単に許してくれた。
そして、彼女は急に真面目な顔になり、話しはじめた。

少女
「実は要求とは、この家にかくまってほしい。…私はある者達に追われている。」

大和
『…唐突だな。てか、そんなまんがや、テレビみたいな話があるのか』

少女
「聞き入れられない場合は、断ってもらってもかまわない」

そして、懐にあるであろう拳銃に再び触れた。

大和
『こちらの意志無関係…。　…というか…選択権、一つしかないじゃん』

僕を凝視する、少女の視線がすごくささる。

少女
「あと、助けを呼んだり、逃げた場合…、死ぬことになるからやめとけよ」

大和
「……。」

少女
「ふふっ」

大和『…本当に死ぬな』
そう悟った僕は、こう答えるしかなかった。

大和
「…わかりました。」

少女
「感謝するぞ。」

少女は初めてニコリと微笑みんだ。花が咲いたようにとてもかわいかった。

大和
『…なんだよ普通の笑顔できるじゃんないか』

少女は恐かったが、大和は少し照れて、素直にそう思った。
…しかし、この時は少年はこれからどうなるなどと、冷静に考えることができなかった（まだ頭がパニくっていたので）。

少女
「私の名前を教えておこう。私は綾埼（アヤサキ）　幸（サチ）だ。」

だから、これから彼の人生が平和な平らな道から、暗黒の雷雲が立ちこめる険しい山々を登る道になったことを…。

ガシャーン！！！

大和
「っ！！？」

…まだ知らない。

to be continued

Vol.3 ＝black despair day＝（前書き）

だいぶ、携帯に小説をうまく書き込めるようになりました。文章はまだまだ未熟ですけど、楽しめるよう頑張ります。では、三話目どうぞ（^-^）

Vol.3 ＝black despair day＝

…普段の日常の中、きっかけなどで、予想もしないことがおきる。もちろん、予告なしで…。きっかけが大きければ、おきるであろう事態も大きいだろう。

…俺の前にいるこの哀れな被害者はこれからおきる（おきている）事態に耐えられる……かな……？

大和

「…なっ！！？」

…突然だった。リビングの中はは白い煙でいっぱいだ。

幸

「目を閉じとけ…」

あたり一面、煙のなか、彼女がそういったのが聞こえた。

幸は煙の源を蹴り飛ばした。

ガシャーン！！！

再びガラスの割れる音が聞こえた。煙が薄くなっていく。さらに…

ドシャーン！！！
ドタドタドトッ！！

…ガラスの全壊の音。たくさんの人の足音。目を閉じていた僕は、何がおこったのかわからない。少しすると、まわりから音がしなくなったので、ゆっくりと目を開ける。

大和
『……。
……短い人生だったな（涙）
…かわいい彼女つくりたかった。
…どうせ死ぬなら、あの時ああすればよかった…　この時は…』

…僕は人生を悔みながら、泣くしかなかった。僕と彼女は、どこかの国の特殊部隊のような格好をした人達に囲まれていたからだ。

この状況なか、大和はこれまでの人生を悔やんでいたが、幸は恐がった表情も、焦る素振りもしなかった。そして、部隊の中にいる黒のサングラスをかけて、黒のスーツをきた金髪が目立つ男。その隣に立つ、同じ服装をし、セミロングの黒い髪をした女。この二人を睨めつけていた。

幸
「…レイ、…春妃（ハルヒ）」

金髪の男

「お嬢様やっと捕まえましたよ。…もう逃げれませんからね」

そういいながら、黒のサングラスをはずす。レイという男はかっこよかった。歳は二十代だろう。髪はハリウッド映画にでてくる俳優のような金髪なのに対して、顔はさわやかジャパニーズボーイだった。

彼は『ニコリ』と笑う。　しかし、彼女は『ギロリ』睨む。

レイ
「さあ、帰りま・・・・」

幸
「いやだ」

彼の笑顔が固まる。

レイ
「わがまま言わ・・・・」

幸
「い・や・だ」

彼の笑顔がひきつる。

レイ
「・・・・・お嬢様。」

幸
「…減給されたいのか？」

彼は幸側についた。

レイ
「俺はお嬢様の意見に全然賛成ですよ」

ドスッ！！

レイ
「ぐふっ！？」

セミロングの女
「…大バカですか？…給料を払ってるのは、幸様じゃなくてご主人様ですよ…」

レイの脇腹を殴った春妃という女は言った。小さい声だか、不思議とちゃんと聞こえる声をしている。
彼女もサングラスをはずしており、きれいな顔をしていた。同じく、二十代ぐらい。黒のセミロングの髪がよく似合う。しかし、どこか冷たいオーラがでている。

春妃
「…幸様、帰りますよ…。…家を出た理由が『この生活に飽きたから…』なんて、理解不能です…。」

幸
「…はるひ」

春妃
「…毎日、あんなにも美味しそうなものを食べれるのに…」

レイ
「・・・そんなふうに考えてるの、春妃さんだけじゃないですか？」

彼の脇腹に再び衝撃が襲う。

レイ
「ぐはっ！！？」

春妃
「…大体、あてもないのにどうするつもりですか…？」

幸
「あては、つくった。」

春妃
「…しかし…」

幸
「くどいぞ、はるひ」

春妃
「・・・・・。…わかりました…」

レイ
「…春妃さん、いいんですか？」

春妃
「…幸様に何言ったところで、考えを変えられないのはいつものことです…」

はるひという女の人は何やら、了解したようだ。そんなやりとりを自分の世界に落ちていた僕は、ただ『ボー』っと眺めていた。そして、我に返る。

大和
「…って！！『この生活に飽きたから』って、家出かよ！？てか、ある者達に追われてたんじゃないのか！！？」

そんな僕の言葉に彼女は、『まるで何を言っているかわからない』というような顔をする。

幸
「何のことだ？」

大和
『こいつは…（怒）』

はるひ
「…こちらのかたは…？」

幸
「ルームメイトだ」

大和
「だれがおまえみたいな危険ガールのルームメイトになったんだ！！！」

僕は彼女が恐ろしかった気持ちを忘れて、怒りがわいてきた。たが、僕が怒ったところで彼女にかなうはずがなかった。彼女は懐

から、黒の箱らしき物をとりだした。

カチッ

「・・・幸『この家にかくまってほしい』・・・・・・大和『・・わかりました』・・・・・・」

大和
「いつのまに録音を・・・！？」

幸
「ふふっ」

しかも、余計な部分はちゃんとはぶいてある。彼女は勝ちを誇った笑みを浮かべる。

大和
『・・くっ！！・・・・負けるな、僕！！』

僕はそう思い、自分を奮い立たせた。

大和
「銃を撃つような危険なやつと一緒に入れると思うか！？」

幸
「あれは合図だ」

大和
「何の！？」

彼女は意味がわからないことをいいだした。銃を撃つような危険な合図が、この今の日本に必要なのだろうか？

レイ
「一発目は位置を教える合図で、二発目は呼び寄せの合図なんですよ。ハッハッ！！僕が考えたんですよ」

レイという男は何が誇らしいのか、僕に自慢げに笑いかける。

大和
「……。…とにかく！！僕はいやだよ！！」

しかし、彼女は許すはずがない。彼女がふさぎ込みはじめた。目には涙ををためている。

レイ
「あぁ～、泣かした！！」

春妃
「…男として最低ですね…」

大和
『おまえらなんで、そっちの味方なんだよ。…僕が悪いみたいじゃないか』

レイと春妃、まわりにいた部隊の皆さんまで僕を冷たい目で見てきた。さすがに後ろめたい。

幸
「…だめか？」

彼女は再び問い掛ける。目が眩しい。これ以上、目線をあわせそうにない。僕の頭の中は、パニックに陥っていく。

大和

『・・・あぁぁぁぁ～～～～～！！！！』

大和

「・・・いっ、・・・いいですよ・・・」

すると、彼女は顔をあげた。その顔には涙など一滴も流れたあとすらもない。

大和

『・・・・・・・・・・わかっていたんだ嘘だって・・・、・・・・・わかって・・・・・うっ・・・・うぅ・・・・（涙）』

少女の顔は『ニヤリ』と今まで以上怪しく笑っていた。彼女の笑みはこれからの少年の日々を想像させるのにはじゅうぶんだった。

そんな笑顔を見た大和は、ふらりと二階にある自分の部屋に向かう。そんな彼に後ろから…

春妃

「これから、わたくし達もお世話になります」

レイ

「えっ！？『わたくし達』って、俺もですか！！？」

という声が…。しかし、彼には聞こえているのだろうか？彼は

その場にいる人達を残して、部屋にこもるのであった。

幸

『…これから楽しくなりそうだ』

少女は笑う。

to be continued

Ｖｏｌ．４　少年の過去　（あの日の始まり）

…あなたは今でも僕を見てくれているでしょうか？

…あなたが言っていた強さを僕は手に入れたのでしょうか？

…あげたかったよ、あなたが好きだったマスコットのキーホルダーを……。

……母さん。

少年

『……。

…ゆれている

…まだ、そっちに行きたくない……』

男

「…起き……だ。……校……遅刻す…ぞ……」

少年

『……うるさい。

…なんだこいつは。

…ムカツク』

そして、僕はまだ重い体をゆっくり起こし、鋭い眼光で自分の父親である男を睨めつけ、口を開いた。

少年
「…うるさい、バカ」

まあ、いつもの朝だ。こうやっていつも、父さんが起こしてくれる。

父さん
「と…、父さんにむかってバカとはなっ…なんだ！！」

感謝はしている。父さんが起こしてくれなきゃ、いつも遅刻だ。たが、やっぱり朝起きるのがとてもつらい僕には、僕を起こすやつがむかついてたまらない。僕はすごい目つきをしながら、ベットからおりる。

父さん
「…母さんを起こしてくれ」

父さんは少し引きつった顔をしながら言った。一緒の部屋で寝ている父さんが起こせばいいとも思えるのだが……。これは、父さんには無理な話だ。僕の低血圧は母さんからの遺伝。母さんの低血圧は僕と比べても次元が違う。言うなら、超低血圧…。そして、母さんをおとなしく目覚めさせることができるのは、今のところ僕だけだ。

少年
「……わかったから、むこう行ってくれる。いつまでもいられる

とうざいよ。」

父親
「……。」

ごめんとは後で思うのだが、これは遺伝なので仕方ない。
そして、僕は制服に着替えはじめた。制服は少し大きい。母さんが大きくなるといって、少し大きめの制服を選んだのだ。着替え終わり、上着をもつと目覚めの悪いメスライオン（母さん）を起こしに行った。

母さんは幸せそうな寝顔をしている。

少年
「はぁ……」

ため息をつくと、僕は母さんの肩を揺り動かした。

母さん
「…ん……」

少年
「母さん朝だよ…。起きて…」

ビュッ！！
ピタッ！！

母さんの鉄拳が僕の顔面スレスレで止まる。これが父さんなら、顔面に受けとめて鉄拳が止まる。そしてさらに、『死ね』や『クズ』など、とうてい一児の母とは思えぬ言動と、暴行を加えて部屋から

追い出すだろう。その時には、心も体もボコボコだ。
鉄拳には慣れたとはいえ、驚くものは驚く。まあ、それで毎朝、僕の頭が完全に目覚めるが…。

母さん
「……大和。…もう朝…？」

少年
「…そっ…そうだよ」

母さん言わく、僕に起こされるのはとてもさわやかに目が覚めるらしいが、どう見てもとても機嫌が悪そうにしか見えない。

少年
「…早くおりてきてよ。朝飯食べよう」

母さん
「はぁ～いぃ……」

僕は母さんを置いて、リビングにおりていった。キッチンでは父さんが朝食をつくっている。母さんが料理が下手というわけではない。父さんが、ある日の朝、機嫌が悪かった超低血圧の母さんに、包丁で殺されかけたからだ。それ以来、父さんは、朝、母さんに凶器を握らせないようしている。

父さん
「…母さん起きた？」

少年
「…起きたよ」

しばらくして、母さんがリビングにおりてきた。そのときには、テーブルにはトーストにエッグ、ソーセージ、サラダ。そしてコーヒー（僕は牛乳）の朝食セットができていた。

父さん
「…ゆっ、由美。……おはよう」

母さん
「…あなたの声、頭に響くからやめて」

父さん
「…すまん」

父さんの精一杯の朝のあいさつを、母さんはひどい一言で返した。

少年
『…父さんは何で結婚したのかな？
母さんにたぶん間違いで何度も殺されかけているのに…。』

僕はいつもそう思っていた。
朝食を食べおわり、歯を磨いて、髪をとかし、八時。ちょうどいい時間だ。この頃になると、母さんの機嫌も少しよくなる。

父さん
「行ってくるよ」

父さんが玄関で靴を履きながら、母さんに言った。

少年
「待って、僕も行くよ」
僕は父さんのあとを追うように靴を履いた。
母さん
「あなた待って」
父さん
「…なっ、…なんだい？」
父さんは少し戸惑っている。僕もドキッとした。
母さん
「今日は給料日でしょ。ちゃんと、見せてくださいね」
さすが、母さんだ。父さんをしっかり管理している。父さんは戸惑いはなくなったみたいだが、まとうオーラが気のせいか、少し重くなった気がする。
父さん
「……わかった」
少年
『…父さん…』
母さん
「いってらっしゃい♪」
僕と少しテンションが低い父さんは家を出た。

少年
「…ばれたと思ったよ」

父さん
「…あぁ…」

父さんの声は小さい。

少年
「父さん、ちゃんとケーキ買ってきてね」

父さん
「…わかってるよ」

そういうと父さんはニコリと笑った。

…それはいつもの朝だった

Vol.5 ＝new morning＝

…出会いとは不思議なもの。意図的にせよ、偶然にせよ、お互いに何らかの感情を生み、つなげる。　…あの方はあの少年に出会い、どんな感情をもたれたのだろう‥‥？

…雀が鳴いている。大和の部屋にはカーテンの隙間から、日差しが差し込んでくる。そして、扉が静かに開く。

大和

『‥‥うっ‥うぅ‥‥す‥‥せん‥‥。

‥‥なんで‥僕‥‥おどされ‥‥‥』

夢をみていた。うれしそうな笑みの少女が、僕を精神的に陥れる夢だ。

男

「大和君…、おきてください…」

大和

「‥‥うっ！！‥‥‥ん‥‥」

薄い光が入ってくる。僕は静かに薄く目を開いた。目の前には、さわやか顔の男が、僕を起こすために僕の体を揺らしていた。

大和
『……。
…誰だ？…この男は？』

そう思いながら、いつも起こしてくれる父さんに言っている暴言を吐く。

大和
「…うるさい、…死ね」

男
「うわっ……事前にわかっていたとはいえ、かなり傷つくな…」

男は少し傷ついような顔をする。だが、僕は無視して、再び目をつむる。まだ、目覚ましはなっていないはずだ。
男はため息をつき、懐に手をいれた。

ゴリッ

男
「あと三秒数え終わるまでに、起きてくださいよ」

3……、2……、1……

大和
「…って！！？うぎゃぁーーー！！！」

ガタタッ！！

僕はベットから、緊急回避。床に転げ落ちた。金髪の男が拳銃を懐になおしている。

男
「まったく、お寝坊さんですね」

男の顔はさわやかでうれしそうな『笑顔』だった。

大和
「殺す気かぁーーー！！！？」

男
「ん～、場合によってはそうなりますね」

僕の心臓は破裂しそうなほど、驚いていた。だか、男は何も悪気がない顔をする。

大和
「てか、おまえ誰なんだ！！？どうして、なぜ僕の名を知っている！！？」

目の前の男など知らない。僕の友人にも、知人にも、親戚にだって、こんなやつを見かけたことなど…

男
「俺ですか？俺はお嬢様専属のボディーガードの中村　レイですよ。覚えてないんですか？ほら、昨日の夜から、一緒に同居をはじめたじゃないですか。大和君の名前を知っているのは、お嬢様があなたのプロフィールを見せてくれたからですよ」

瞬間、さっきまで見ていた悪夢が、現実の話だったことを思い出し…、

大和
「そっ・・・・そうだった・・・・たしか、一緒に」

僕の顔が暗くなり、僕の気持ちが、絶望という名の沼に沈んでゆく。

レイ
「あぁ、落ち込まないでくださいよ」

大和
『・・・・こいつは人の気も知らないで・・・・』

レイ
「ちゃんと生活費は払いますから」

大和
『・・・・・そこを落ち込んでるんじゃないだろ（怒）』

眠気がすっかり覚めた頭を動かし、時計をみる。…五時四十八分。…はっ、早すぎる。

大和
「まっ、まだ一時間は寝れるじゃないか…！！？僕の至福の睡眠時間を返せぇ！！！」

レイ
「いや～、お嬢様の命令ですから」

大和
『やつの差し金か！！？』

そう…、やつとは、昨日突然、家にやってきた危険ガールのことだ。きっとこの命令も、うれしそうな笑みをして、だしたんだろう。

レイ
「『どんな手を使っても確実に起こせ』『二度寝するなら永眠させてやれ』と言われていますんで、起きてください」

僕は主人に忠実で、一般市民を朝から襲ってきたクソ野郎を強く睨めつける。…が、それ以上はもちろん恐いので、素直に言うことを聞き、リビングへ朝食を作りにおりていく。気分は最悪だ。一階の洗面所で顔を洗う。鏡に映る僕の顔は疲れているようだ。リビングに行くと、リビングはもとどおりだった。ガラスはちゃんとはめられており、壁に銃であけられた二つの穴さえない。

大和
『…いつのまに』

実は、大和が寝ているとき、幸の手配でガラスも、壁の壁紙も、きれいに補修されたのだった。ガラスはすべて防弾ガラスに変えられたのだが…。

僕は朝食をつくろうかと思い、キッチンをみるとセミロングの女の人がいた。たしか、春菜という名前の人だ。

春菜

「…おはようございます、大和さん…。…朝食は作らせていただきましたが、めしあがられますか…？」

大和
「えっ？あっ、はい…」

…正直驚いた。まさか、朝食をつくってくれているとは思ってもいなかった。しかし、全身黒スーツにふりふりエプロンはどうかと思うが…。

春菜
「…とりあえず、テーブルに座ってお待ちください…」

大和
「あ…はい…」

女の人の手料理食べるの久しぶりだ。いつも、父さんのしょっぱい料理か、コンビニで買ったものだったから、少しうれしく思った。
だが、ここでふっと気付く…

大和
『……そういえば、やつの姿が見えない。どこにいったんだ？』

辺りを見わたしても、やつの姿がなかった。僕は気になり、春菜さんに聞いた。

大和
「あの、……やつ……じゃなくて、……さち……はどこに行ったんですか？」

春菜
「…呼び捨てで、名前を言われるなんて、そんなにも仲がよろしんですね…」

大和
『…この人は、昨日のどこをみたらこんなことを言えるんだろう』

春菜
「…用事があると言われ、早朝にお出かけになりましたよ…」

大和
「そうですか」

僕は内心、安堵の気持ちでいっぱいだった。以外と平穏な日々が過ごせそうだと。

しばらくすると、僕の前には純和風の朝食が用意されていた。

大和
「…おいしそう」

レイ
「春菜さんの作る料理に、まずいものなんてないですよ」

いつのまにか、レイが隣で朝食を食べていた。

大和
「おまえいつから…！？」

レイ
「さっきからいましたよ」

大和
「いや、いなかっただろ!?てか、さちのボディーガードしなくていいのかよ!?」

レイ
「いや、お嬢様強いですしね。今日はめんどくさいし、ゆっくりしたいからいいかな〜っと思って…」

大和
『こいつ、ボディーガード失格だよ…』

レイは『何も心配いらない』という顔をして、朝食を食べている。

レイ
「食べないんですか?」

大和
「…あぁ、食べるよ。いただきまーす」

メニューはご飯に味噌汁、鮭に、漬物だった。まずは、味噌汁からだ。

大和
「…うまい」

完璧を思わせた。旨味、具の火通し加減。なにより、父さんの作る味噌汁よりしょっぱくない。鮭も、うまかった。焼き加減は申

し分なしだ。漬物は……市販だった。

大和
「うまい、うまい♪」

箸が快調なペースで進む。そんな様子をじっと見る人がいた。視線がすごく気になる。

大和
「……あの……、おいしいですよ…」

春菜
「…そうですか…」

なおも、こちらに視線が伝わり続ける。僕の箸は、だんだんと動きが遅くなる。

大和
『……食べづらい』

そしてついに、箸が止まる。すると、レイが驚いたように小声をかけてきた。

レイ
「…大和君、死ぬ気ですか！？…春菜さんは食べ物に対して、とてつもなく厳しい人なんですよ。……残したりしたら、殺されちゃいますよ……！！」

自分の耳を、今の言葉を疑った。

大和
『…殺されるって、どういうことですか！！？』

ふっと春菜さんのほうを見る。こちらを睨め付けて、右手に包丁をしっかりと握っていらっしゃる。それを見た僕は急いで、残りの朝食を口にかけこむ。

大和
「・・・・ごっ！！・・・・・・ごちそうさまでした・・・・」

春菜さんの殺気らしいもの徐々になくなった。

大和
『寝起きも…、食事も…、命懸けでしないといけないなんて、やっぱり、今の僕に平穏な日々なんてあるわけないよな・・・・』

僕は深いため息をつき、皿を春菜さんに渡し、出掛ける準備をしはじめた。

レイ
「どこにいくんですか、大和くん？」

大和
「バイト。…昼飯はあるもの使っていいから、適当に食べといてよ。」

春菜
「…何にもないのにですか…？」

大和

『…やばい、また春菜さんの機嫌が悪くなってる』

春菜はどこからだしたか、ナイフらしきものを持っている。

レイ

「春菜さん、買いに行けばいいじゃないですか」

大和

『レイ、ナイスフォロー♪』

しかし、レイが大和にフォローなど考えるはずがなかった。レイは冷たいオーラがでている春菜に、ポケットから何かを取り出し渡した。

レイ

「ほら、一万円札ですよ。さっき、机の引き出しの中で見つけたんですよ」

大和

「…って!!?それ俺のへそくりぃぃぃーーー!!!?」

しかし、もう大和には手出しできなかった。一万円札は、春菜にわたってしまったからだ。

春菜

「…じゃあ、つかわさせてもらいます…」

大和

「…いや…、….あっ、あぁ….うぅ….」

何も言い返せるはずがなかった。レイは生活費は自分達で払うと言っていたのに、たぶん、忘れているようだ。

大和

「……（涙）。……バイトに行ってきます……」

大和は、自分の一万円札に別れを告げ、家をでた。

…その後、この一万円はおつりさえも大和には戻ってこなかったらしい

to be continued

Vol.6 ＝confession of love?＝

人は楽しいと思えれば楽しいし、悲しいと思えば悲しいくなるもの。だから、いつもプラス思考なら人生を簡単に楽しめるんだろう。
でも、彼はすぐマイナス思考になるから人生楽しめてるのかな…。

ただいま六時半ぴったしだ。早朝とはこういうものを言うんだろう。空気が冷たくて、気持ちいい。ランニングをしているおじさんが向こうからかけてくる。新聞配達の青年が自転車を走らせていく。トランシーバーみたいなのを持って、フードをかぶっている人？もいる。それ以外にも数人、散歩や出勤をしてるようだ。
僕は軽く背伸びをした。

大和
「ふぅ…。少し早いかな」

僕は仕事場にむかっていた。バイトの場所は小さなフリーマーケット。いわゆる、スーパーの店員をしている。だが、このバイトはあまり好きではない。なぜなら…

女の子
「あぁっ！！おはよー！！ヤマトくん！！」

彼女がいるから。…彼女が僕と同じバイトをしているからだ。
僕は苦手な敵キャラに出会ってしまったようないやな顔をして、ニコニコ顔の女の子に返事した。

大和
「おはよう…、ひよ」

女の子
「あはははは！！なにその顔～！？変なかお～！！」

大和
『余計なお世話だ』

彼女の名前は大宅（オオタケ）　妃奈（ヒヨナ）。僕のいとこである。身長は僕より１０ｃｍぐらい小さく、さらさらしたショートヘアーをしている。頭にはいつもと違って、猫耳がはえている……。……猫耳？？？
まあとりあえず、年は同じ。見た目は、そこらの活発そうな女の子とたぶん変わりはしない。だが、彼女が漂わせるオーラとも呼べないものは、とても軽く、無駄に明るすぎる。
そんな彼女に気になってしかたない猫耳のことを聞いてみた。

大和
「どうしたんだ、その頭の耳…？」

妃奈
「可愛いでしょこれ！！家の前に落ちてたんだよ！！！あはっ！！」

彼女は何がうれしいのがニコニコ顔だ。

大和
『何が『あはっ！！』なんだ。それより、そんなあやしい猫耳を拾ってかぶるなよ…』
まったく彼女が理解できない。理解したいとも思わないが…。

妃奈
「あはははは！！そういえば、ヤマトくんは何でこんなに早いの～！？」

その時、妃奈だけに聞こえる大きさで猫耳から声がした。

猫耳
〈……大和は愛を告げるため、あなたを待っていたらしいぞ…〉

妃奈
「えっ！？…やっ、ヤマトくん、わたしに愛の告白をするために待ってたの！！？
キャーーーーー！！！！！
えっちぃぃーーーーー！！！！！」

大和
「はぁ！！？」

彼女は意味のわからないことを言いだした。だから、彼女はいやなんだ。いやそれより、彼女は自覚はしてないだろうが、彼女の悲鳴にも聞こえる大きな声はまわりの人達に聞こえたようだ。みんながこちらを、僕を、冷たい視線で睨めつけてくる。

大和

「えっ！？…えぇっ！！？」

今、彼らから見える僕は目の前にいる女の子に痴漢をしたやつに見えているんだろう。…無実なのに（涙）

大和

「…ちっ、違います！！！僕は何もしてません！！！！ひっ、ひよ！！！あの人達に『誤解だ』って言ってくれ！！！！」

僕はあわてながら、妃奈に助けを求める。彼女もまわりの人達に気付いたようだ。彼女の顔が真っ赤になっていく。彼女はその頬の赤を隠すように、手をそえて言った。

妃奈

「あっ！？ごっ、誤解だよ！！！」

大和

『そうそう…、わたしがふざけていただけですって』

僕はホッと肩の力を抜いく。だが…

妃奈

「ヤマトくんはわたしに愛の告白をしたの！！！キャーーーー！！！」

大和

「……そうそう、僕がひよに愛の告白をーーー…って違うだろ！！！！」

ここに新たな誤解が生まれた。そして、彼女の妄想は暴走をは

じめた。いや、はじめていた。

妃奈
「ヤマトくんが、わたしのことをそんなふうに思ってたなんて知らなかったよ！！顔を会わせるたびに、ヤマトくんが顔をおもしろい顔してたのは、わたしに対する恋心を隠すためだったんだね！！！」

大和
「そんなわけないだろ！！！僕のおまえへの恋愛感情など、この世に存在してなーーーい！！！！！」

僕の否定の言葉など彼女には聞こえておらず、何を思ったのか、彼女は恥ずかしそうな顔をする。

妃奈
「照れなくても大丈夫だよ、ヤマトくん！！何も言わなくてもわかってるから！！」

大和
「全然大丈夫じゃないだろ！！！話を聞けーーーー！！！！！」

再び猫耳から妃奈だけに聞こえる声がした。

猫耳
〈……だが、あなたにはこのバカより、いい王子さまがいる…〉

妃奈
「あはっ！！そうなんだよね！！わたしにはいつか、白いリムジンに乗った、すごくかっこいい、すごいセレブな王子さまが迎えに

くるんだよ！！
だから、ヤマトくんの気持ちはうけられないの！！！
ごめんね！！」

大和
「てか、断るのかよ！！！！？」

彼女のなかで知らない王子さまに負けて、僕は失恋した。なぜか、悔しい。いや…、腹立たしい。むかついてくる。だが、僕は怒りを沈め、冷静になった。

大和
『落ち着け、僕があいつの相手などしなければいいんだ。
…それに良かったじゃないか。とりあえず、この妄想バカに勝手に告白を受けられなかったし』

そう自己暗示をして、ふっとまわりを見る。いつのまにか、たくさんの人が集まっていた。そして、まわりのみんなが妄想バカに失恋した僕をみている。哀れな目で…。

大和
「何でこうなるんだよ！！！おい、ひよ！！！この新たな誤解を解けーーー！！！！！」

しかし、妃奈は妄想に忙しかった。猫耳からのまたまた声がする。

猫耳
〈……王子リチャードが来たみたいだ…〉

妃奈

「あはっ！！遅いよリチャード待ってたんだから～！まったく、お寝坊さん♪」

大和

「おい、ひよ！！！聞けよ！！！」

だが、彼女はいっこうに妄想世界から抜け出さない。誰もいないほうへしゃべりかけている。リチャード？にメロメロらしい。僕はそんな彼女をみて、妄想に生きている彼女に助けを求めるは無駄だとわかった。だから、僕はこの場から去ることにした。

大和

『…クッ、…なんでこうなるんだ！！』

僕は哀れな目で見る人達の間をかけていく、涙をながしながら…。言っておくが、ふられたから涙を流してるわけじゃない。なんで僕がこうなるのかわからず悔しく、悲しいから流してる涙だ。

走りはじめると、まわりの人達が声をかけてきた。

おじさん

「人生、生きてればいいことあるさ」

哀れな目で見るおじさん。

お兄さん

「頑張れ、少年」

哀れな目で見るお兄さん。

少女
「笑えたぞ、バカ♪」
愉快そうな目で見る幸さん。
みんな僕に声援を送って……。
大和
「…ってちょっと待てぇー!!?いつからそこに!!!?
……あれ?」
僕が振り向くとそこにみえたやつの姿はなかった。
大和
「……。そうだ…、疲れてるんだ…。僕は何もみてない…。……
……はっ、早くいこう……。」
僕は認めたくない事実を胸に抱き、妄想に浸ってる彼女を残し、その場をあとにした。
実は少女が猫耳から妃奈をあやつっていた。そして、その場の人々にまぎれ隠れていた少女ニヤッと笑う。フードをかぶり、片手にはトランシーバーのようなものを持っている。
少女
「さて、次に行くか♪」
少女はそう言うと、少年が向かった方向にうれしそうにかけていった。

後日、少年が一人の女の子に告白した噂が学校中でひろまった。

…哀れ、少年。

To be continued

Vol.6 ＝confession of love?＝（後書き）

Vol.5で春妃の名前を春奈と間違えてしまいました。すいません。

Vol.7 work and trouble

…物事を起こせばそれには結果があらわれる。それは人と人とのやりとりにもいえることだろう。
私とあいつとのやりとりはどういう結果があらわれるだろう。
…楽しみだ♪

大和
『疲れた…。とても疲れた』

僕は今、仕事場にいる。小さなスーパーマーケットの中だ。僕はとても疲れているが、バイトが終わったわけではない。まだ、始まったばかりだ。今は開店前で、新しい商品を並べている。

パートのおばさんA
「なんだか大和君、今日は疲れてるわね。何かあったの？」
おばさんが僕にやさしく声をかけてくれた。僕は苦笑いで答える。

大和
「はは…。朝からいろいろありましてね……」

今日の朝は、本当にいろいろ苦難があって大変だった。…命懸

けの起床に、命懸けの朝食。…へそくりの一万円札との別れ。…勘違いの痴漢。そして、…勘違いの告白。今日だけで、一生の苦難を乗り越えた気持ちだ。

パートのおばさんB
「そういえば、今日から新しいバイトさんが入るみたいね。大和君や、妃奈ちゃんと同じぐらいの年の子だったわよ」

大和
「へぇ～、そうなんですか」

だが、僕には興味なんてなかった。新しいバイトが入ったところで、『ひよ』という存在が僕と同じバイトをしているかぎり、僕の肩の荷がおりるわけがないからだ。僕はいつも何かと失敗や、余計なことをする彼女をフォローしている。彼女が失敗すれば、店長になぜか彼女じゃなく『僕だけ』が怒られるからだ。

妃奈
「おはよございま～～～す！！」

あいつが来たみたいだ。よほど気にいったのか、猫耳をまだつけている。

大和
『今回はただの遅刻だから、店長に怒られるな……いい気味だ』

噂をすれば、少し小太りした恐そうな店長が店のおくからやってきた。ひよを叱ろうとしているみたいだ。

大和

『ははっ、僕を困らせた報いだな』

僕は少し満足気にその様子を見ていた。しかし、少し様子が変だ。店長とひよがなにやら話しているが…ひよが僕をちらちらと見ている。さらに、店長も見ているじゃないか。そして、店長はこっちに向かってきた。顔が少し怒り気味だ。…なんで???

店長
「バイト君!!告白するなら、他人に迷惑をかけないでしたまえ!!!!」

大和
『えぇっ!!?…朝の続きですか!?それに僕は告白していないって!!』

店長
「聞けば、君のせいで大宅さんが遅刻したみたいじゃないか!!」

僕は身に覚えのない疑いを妄想バカのせいにより、かけられているようだ。疑いを晴らさなければ…。

大和
「店長、それはですね…」

店長
「なんだ!!いいわけかね!!!まったく、最近の若者はこれだからいかん!!反省という気持ちはないのか!!?」

大和
『いやいや!!こちらの言い分も聞いてくれよ!!』

僕は困った顔を店長にむけた。しかし、店長には僕の表情が気にくわなかったんだろう。

店長
「なんだね！！その目は！！！クビになりたいのか！！？」

さらに怒られた。
僕はそんなつもりで向けたわけではないのに、かなり勘違いされた。

大和
『…やば！？
店長、顔が真っ赤ですよ！！湯気も出てますよ！！！』

僕はすぐさま素直に謝った。

大和
「すっ、すいませんでした！！」

店長
「次にこんなことが起きたら減給だからな！！！」

そういうと、店長は店のおくに戻っていった。…かっ、かわいそうな僕（涙）

妃奈
「も～！！大丈夫～！？」

大和

「大丈夫じゃないですよ…。ひよさん…（怒）」

怒りをむきだしにし、彼女のほうをむく。今、僕のまわりは殺気でいっぱいだろう。しかし、彼女はニコニコ顔だ。まったく僕の怒りに気付いていないようだ。…むかつく。

妃奈

「あはっ！！大丈夫そうだね！！」

大和

『こいつ…、一度殴って、その頭の中を直してやろうかな…』

僕がそんなふうに考えていると、いつのまにか店のおくに行ったはずの店長がすぐ横にいた。僕の顔から怒りが引く。

大和

「…てっ、店長！？なっ、何でしょう！！？」

店長は僕をじろりと睨めつける。まだ怒っていらっしゃるようだ。顔の赤みが抜けてない。僕は、涙目でチラリとひよを睨めつけた。しかし、ひよは僕のほうなど気付きもせず、店長の隣にいる人を興味ありげに見ているようだ。

店長

「君に今日から入った新人のバイトさんを指導してもらう」

大和

『うわ…、やだなぁ…。ひよのフォローだけでも大変なのに…』

僕は店長の隣にいた人に顔を向ける。女の人のようだ。髪を後

ろで縛ってポニーテールにし、眼鏡をかけて、うつむいている。そして、その人が顔を上げた。

大和
「……。」

眼鏡をかけた少女は『ニコッ』と微笑んだ。

大和
「…ナンデココニイルンデスカ？」

その女の人は…、その少女は…、今、大和が一番会いたくなかったやつだった。大和の顔がこわばる。

店長
「知り合いなのか？」

大和
「彼女は…！！！」

眼鏡をかけた少女
「知り合いじゃないです。初めて会いました」

大和
『えっ！？』

僕の返事を彼女は愛想の良い笑顔でさえぎった。そして、彼女の笑顔は僕が昨夜見た笑顔とは全然…違う？？

大和

『あれ…？別人？？？』

姿はやつ本人なのだが、笑顔が違いすぎだ。何かを虐げる感じの笑顔ではなく、なんだか感じのいい笑顔。僕は本人じゃないような気がしてきた。

店長
「まあ、どうでもいいことだな。じゃあ、バイト君ちゃんと指導しろよ」

大和
「えっ！？…えぇっ！！！」

店長は僕に有無を言わさず、去っていっく。僕と眼鏡をかけた少女の視線が合う。彼女は今だに愛想の良い顔だ。そして、そのままお互いに動きなく、少し時が流れた。

大和
『なんか話さなくちゃ…』

しばらくして僕はそう思いはじめ、彼女に話しかけようとしたが…

妃奈
「あはっ！！きれいな人だね～！！名前なんて言うの！？
バイト初めてなの！？
レジ打ちできる！？レジ打ち教えてあげるよ！！
わたしのことを先輩って呼んでいいんだよ～！！！」

バカに邪魔された。…こいつは（怒）

大和
「おまえはまだいたのか！？しかも、バイト初めて一ヵ月もたってない、レジ打ちさえ満足にできないやつが先輩面すんじゃねえ！！！」

すると、ひよは頬をふくらませて口を尖らせた。どうやらこれで、怒ってるつもりみたいだ。まったく恐くもない。

妃奈
「十七年間一度も彼女ができたこともないヤマトくんに言われたくないよ～だ！！！」

大和
「うっ…、うるさい（涙）！！そんなこと関係ないだろ！！！」

関係ないことだったが、僕は悔しかった。涙が少し出かけた。ひよは舌をだし『べー』っとすると、仕事をしに店のおくへとむかっていった。

再び、大和は眼鏡をかけた少女と二人だけになる。彼女はさっきとまで違い無表情だった。

大和
「……。」

眼鏡をかけた少女
「……。」

大和

『‥‥こっ、‥‥この感じはどこかで‥‥‥』

目の前の彼女の表情を見てみる。そして、僕は目を背けた。認めたくない事実が、目の前にありどうすればいいのかわからなくなる。

大和

『…違うよな！…違うよな！！…違うよな！！！

そんなわけないんだ！！！！

だっ…、だって笑顔が…。

‥‥‥。

‥‥‥そうだ！！！

名前を聞けばいいんだ！！！‥‥‥そうさ、‥‥彼女がやつのわけがない‥‥。

…やつはあんな人のよさそうな笑顔なんかしてなかった！！

よし！！！

…聞いてやる！！

…聞いてやるぞ！！！！！』

僕はとても悩んだすえに恐々と名前を……聞いた。

大和

「…あの～…、‥‥おっ、…お名前は‥‥‥なんて‥ぃぅ‥‥‥で‥すか？」

すると、彼女はさっきとまったく違う、大和が見覚えのある何かを虐げるような笑顔をした。

眼鏡をかけた少女

「ふふっ…。私のことを忘れたのか？私だ。幸…だ」

大和
「……。」
大和は固まった。しばらく、固まってようやく口を開ける。
大和
「…なっ、…なにを…してるですか…？」
少女は『ニヤリ』と笑いながらいった。
幸
「暇つぶしだ♪」
大和
「……。」

このとき、大和は心に強く思った『遊ばれる』と…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

第八話

ここは少年のクラス。今は、四時間目が終わったところ、昼休みになる。生徒達は、授業から解放され思い思いに昼食をとっていた。そして、少年は少年の親友である男の子と一緒にいる。

僕は自分が着ている学生服のポケットをあさっていた。

少年
『…財布がない？』

いくらさがしてもないので、仕方ないと思い、友に助けを求めてみる。

少年
「ごめん、お金忘れたんだ。今度かえすから、…貸して？」

男の子
「…今日も忘れたのかい？」

男の子はあきれ顔で言う。少年は当たり前みたいに返事した。

少年
「うん」

男の子
「そんなに当たり前みたいに返事しないでくれよ…。だいたい、前の分をまだ、返してもらってないよ。」

そう僕は親友に前の分をまだ返していない。

少年
『このままだと貸してもらえないな。
こっちは腹をすかしているのに…』

少年
「僕達の友情はそんなものかい？」

男の子
「友達なら、お金返してくれ」

親友はいじわるだった。…いや、貸してくれそうにないのはあたりまえかもしれない。…仕方ないと思う。

少年
「……沙夜ちゃんにおまえのエロ本の隠し場所を言うぞ」

男の子
「……なっ…」

少年
「…言うぞ」

男の子
「……大和。……それは反則だよ……」

彼はぶつぶつ言いながらも、僕に貸してくれた。

少年
『ありがとう、和磨。もつべきは友達だよ』

男の子
「しかし、また弁当を作ってもらわなかったの？大変だね…」

少年
『そんなことないさ、和磨が貸してくれるから』

そう心の中で言う。
中学に入学して、もう一ヵ月になる。これまで、朝、一度たりとも母さんにお弁当を作ってもらったことがなかった。

少年
「…まあね。だけど、もう慣れてるよ」

少年
『…そう、僕は慣れている』

昼飯を食べおわり、教室で僕は彼とのんびりしていた。

男の子
「そういえば、今日はまだ大宅さん来てないね」

少年
「どうせ、また遅刻だよ。もうそろそろ来るんじゃないか」

案の定、廊下を一人の女の子がかけてくる。あいつだろうわかった。

ドタドタッ！！
ガラッ！！

女の子
「おっはよ～！！ヤマトくん！！！カズマくん！！！」

…テンション高めの元気すぎる声が僕の耳に入ってきた。

少年
「おはよう、ひよ」

男の子
「もう、こんにちはだよ…大宅さん」

女の子
「あはははははは！！そうだよ、ヤマトくん！！もう、こんにちはの時間だよ！！」

少年
「いや、おまえだろ！！」

なんか僕が遅刻したいに言われた。まあ、こういうやりとりは毎度のことだがムカツク。あと、笑い声も勘にさわる。

男の子
「こないだと同じで、寝坊なの？」

女の子
「寝坊じゃないよ～！！今日はちゃんと起きてたも～ん！！」

少年
「じゃあ、ちゃんと時間どおりに来いよ！！」

彼女はよく遅刻するし、理由が嘘や、でたらめばかりだ。
たしかこないだは…
『目が覚めると、全然知らないところいて、まわりには背が小さい銀色の人達いたの！！
いわゆる宇宙人って人かな！？あはははは！！
それでまた眠くなって、起きたら、家のベットにいたんだよ！！不思議だよね！！？だよね！！！！？』だ。
でも、僕に言わせれば、彼女の頭のなかのほうが不思議だった。
そして今回は…

女の子
「だって～！！ママが、『一人じゃ、淋しい』って言うんだもん！！」

少年
「どういう母親だよ」

女の子
「どういう母親だろね～！！あはははは！！」

少年
『……でも、叔母さんならありえるな』

今回は嘘でもなさそうに思える。彼女の家族は彼女がこれだから、家族も変わっている。もちろん、一番変わってるのは彼女だ。

女の子
「ママといえば、今日は伯母さんの誕生日だね！！お祝いしにいくね！！！」

男の子
「へぇ～、そうなんだ」

大和
「おまえ、よく覚えてたな」

うちはごく普通の一般家庭なのだ。しかし、母さんは知り合いが多く、誕生日はその人達がお祝いをしにきたり、お祝いの品を送ってきたりしてくれる。一様、用意はするのだが、何も言わなくてもご馳走なども持ってきてくれる。だから、毎年、父さんはケーキを僕はプレゼントを買う。

女の子
「だって～！！ママが『今度の姉さんの誕生祭、貢ぎ物は何にしようかしら』って悩んでたも～ん！！！
…あっ！！わたしもちゃんと貢ぎ物を用意したから安心してね！！！」

大和
「たっ、誕生祭！？貢ぎ物！！？！…てか、何を安心するの！！！？」

彼女はまた意味のわからないことを言う。しかし、叔母さんが

僕の母さんをすごい敬ってたのは知っていた。けど、そこまで神聖視してたなんて知らなかった。

少年
『貢ぎ物って、これじゃ母さんまるで…女王さま…いや、神様だ。』

男の子
「やっ、大和のお母さんって教祖様だったのか！？じゃあ、大和は…神の子！！！？」

こいつはこいつで何か勘違いをおこしている。普通はあのバカが言ったことなど、信じてはいけないのをわかってない。ただの誕生日だというのに…。

少年
『何が神の子なんだ』

僕は軽くため息をつく。

大和
「僕は人間の子だ」

女の子
「えぇーーー！！？嘘だ！！！！」

大和
「テメェが嘘だ！！！」

僕は彼女を強く睨んで黙らせると、彼にとてもわかりやすく説明してあげた。ただの人の誕生日だと、僕の母さんは人だと。数分間の説明と僕の努力で、彼は理解してくれた。

男の子
「…よかった。じゃあ、大和は『人』だから、お金はちゃんと返してくれるんだね」

大和
『…言わなければよかった』

そう思い、僕は後悔した。横で彼女がうれしそうに笑っている。…ムッ、ムカツク。ちょうど、その時チャイムがなる。

女の子
「じゃあねぇ～！！またねぇ～！！ヤマトくん！！！カズマくん！！あはははははは！！」

彼女はムカツク笑いを残し去っていった。『また』などごめんだ。

男の子
「誕生日楽しみだな」

彼はうれしそうに言う。いつのまにか、なぜか彼も来ることになっているみたいだ。まあ、なんにせよ祝ってくれるならありがたいかな。しかし、本当に楽しみだ。母さんは喜ぶ顔をしてくれるかな…。僕はそれから授業中、今日の母さんの誕生日を思い一人にやけていた。
もちろん、まわりの生徒が、僕を白い目で見ていたことも知らないで…。

…今日もいつもと変わらない学校の一日のはずだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4731a/

喜劇前線地帯

2010年10月10日14時39分発行